

農の未来へ大商談会

国内農業の生き残りをかけて、活性化を図る動きが近畿でも盛んになってきた。環太平洋経済連携協定(TPP)や高齢化など課題を抱える中、生産者や関連業界は、広域での販売先の拡大や輸出による市場開拓に力を入れている。

大阪で488業者PR

「おいしく安全」をテーマにした「おいしく安全」がテーマ。大阪府で21日、国産農産物や加工食品を扱う西日本最大級の展示商談会「アグリフードEXPO大阪」が業者を対象に始まった。

北海道から沖縄まで全国から過去最多の488業者が出展。約3千平方メートルの会場は、かけ声と試食用の料理の匂いで、まるで市場のようなにぎわいだ。出展ブースには、味や安全性にこだわった野菜や果物、肉に、それらを使ったジュースや調味料といった加工品がずらり。次々と訪れる仕入れ担当者に、生産業者が商品の特徴をアピールした。

九条ねぎをドレッシングなどに加工した農業生産法人「こと京都」は、元々ねぎ農家。作物の価格変動や天候の影響など農業の抱えるリスクの解決を目指すうち、値決めや保存ができる加工品の販売に行き着い

おいしく安全 世界も照準

農林水産物の輸出額

日本の農林水産物の2012年の輸出額は449.7億円(速報値)。世界的な景気低迷や円高、原発事故の影響などを受けて、07年の516.0億円をピークに減少傾向にある。政府は20年に1兆円に増やす目標を掲げている。

た。「生だけよりも流通の範囲が格段に広がった」(宮川光太郎営業部長)。2010年に3億6千万円だった売上高は、12年に5億9千万円まで増えたという。

米粉を使った焼きやパスタ、ロールケーキをアピールしたのは、滋賀県の農業法人「甲賀もち工房」。

地元の土壌が転作しづらい性質のため、米の消費拡大にかけて知恵を絞る。

ゴマのポン酢などを展示していた和田萬商店(大阪市)は12年12月から、ゴマのジャムなどを台湾に輸出している。同社の松岡義仁さんは「当面は、海外に目を向けて開拓に力をいれる方針だ」と話す。

主催する日本政策金融公庫は22日までの期間中、来場者1万3千人超、成約数123.2件だった前年以上の成果を目指す。

EXPOをきっかけに食関連の取り組みが拡大。隣

では、大日本水産会による水産物の展示商談会も同時に開かれている。

日本貿易振興機構(ジェトロ)は、EXPO開催に合わせて10カ国16社の仕入れ担当者を招き、別に商談の機会を設けた。EXPOに出展していない生産者を含め約1千社から商談希望の申し込みがあったという。

20日には、関西空港を活用して関西の農産物の輸出増加を目指す「ALL関西『食』輸出推進委員会」(関西経済連合会などが設置)も、ジェットロが招いた仕入れ担当者向けの品評会を大阪市内のホテルで開催。2府4県の30社が、近江牛や果物、お茶などを振る舞った。

ベルギーから来た食材卸会社のリュック・ホーナーさんは「卵やフナずしを試食したがとても味がよかった」と積極的だった。

(木村和規)

The Asahi Shimbun

アグリフードEXPOにはこんな商品が並んだ

流氷ドラフト
網走ビール(北海道)
クチナシの花を使った青い発泡酒など、全て天然色素

米粉たい焼き
甲賀もち工房(滋賀県)
地元の米粉をつかったたい焼き。米パスタなども

京都九条のねぎ塩ドレッシング
こと京都(京都府)
自社で栽培した九条ねぎを加工して販売

赤ちゃんのためのお粥
GreenMind(兵庫県)
残留農薬や放射能を検査した米と水だけでつくった離乳食

ぶたんシロップ
岡井農園(高知県)
素材は無農薬で育てたぶたんなど全て国産



生産者のブースが並ぶ会場
21日、大阪市住之江区